遼寧省朝陽地区隋唐墓副葬品の調査

遼寧省文物考古研究所との共同研究は、今年度も遼寧省瀋陽市の遼寧省文物考古研究所で、朝陽地区隋唐墓の副葬品を調査しました。ここ数年、秋に調査するのが恒例となっていましたが、今回は6月7日から14日までの8日間、調査とともに共同研究等に関する協議もおこなってきました。調査者は、所外の研究者も含めて計8名でした。

今回の調査対象は遼寧省文物考古研究所などによって朝陽市で発掘調査された、隋韓暨(かんき)家族墓、繊維廠(しょう)唐墓、勾龍(こうりゅう)墓（唐墓）の副葬品です。土器・陶器類、陶俑(よう)などを中心に調査を進めました。

調査は、遺物の撮影、熟覧・調書作成、実測、3Dデジタイザによる計測・データ採取など、考古学的調査を実施しました。勾龍墓は1983年に発掘調査がおこなわれた唐墓で、出土した墓誌から唐の高宗咸亨(かんきょう)3年（672）という年代が判明しています。この年は日本では天武元年にあたります。今回調査した三彩の「水盂(う)」は、鉢形の灰皿のような器で、2008年3月にも調査していますが、今回改めて細部の観察をおこない製作技法などを確認しました。来年度、調査研究論集の作成に取りかかる予定ですが、そのためにも今後、こうした詳細な再調査が必要になると考えています。

今回はこうした副葬品調査とともに、調査研究論集の編集方針や今後の調査・研究の進め方について協議をおこないました。また飛鳥資料館における秋期特別展の図録作成のために、喇嘛洞(らまどう)墓や馮素弗(ひょうそふつ)墓などの遺跡の現況を撮影してきました。秋には中国の研究者の招聘を、来年3月には調査を予定しています。

（企画調整部　小池 伸彦）

馮素弗墓の遠景（中央やや左の擁壁部分）